
遊戯王 ~とある高校生の日常的で非日常的な生活~

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王～とある高校生の日常的で非凡的な生活～

【著者名】

ZZマーク

【作者名】
露

【あらすじ】

冬休み最終日、その高校生は母親に買い物を頼まれた。その帰り道、彼は謎の男と出会い、デュエルすることになる。そしてそのときから、彼の日常は大きく変わろうとしていた……。

遊戯王を織り交ぜた学園物だと思つてくれれば幸いです。

プロローグ ～始まりはいつも唐突に……～（前書き）

初めまして。今日からこちらでも小説を書くことにしました。時期が時期なので結構不安だつたりしますが……。後、不安だといえばちゃんと完結出来るかどうか、ですね。

まず、この話を読むに当たつて注意事項を。

- ・この話はアニメの再編物語ではありません。
- ・主人公の使用デッキは不特定です。
- ・基本、チートドローだつたりじやなかつたりとか。
- ・この話のデュエルディスクは基本的にはアニメ、遊戯王ZEXALの遊馬が使つているようなものです。
- ・更新は不特定です。
- ・一話一話が基本短いです。
- ・自作オリカなんてありません。

以上、ですかね。

では、どうぞ。

プロローグ ～始まりはいつも唐突に～

それは、突然のことだった……。

「私と、デュエルして下さい……」

そいつとあったのはホント余りにも突然のことだった。

「お前は誰だ？ 僕は訳の分からん奴とデュエルするつもりはない」「確かに俺は母さんに買い物を頼まれて……、今はその帰りの途中のはずだ。それに昼間だから辺りはまだ明るい。

「フフツ、貴方はまだ自分のおかれた状況が分かつてないようですねえ」

は？ どうこいつことだ？

「辺りを見てみたらどうですか？」

謎の男が何言つてんのか俺にはよく分からんが、辺りを見てみると、明るかつた空が黒い。というか、何かに包まれてる感じだ。

「漸く目が馴れてきたよつですねえ」

今まであこつのことしか見てなかつたから気がかなつたのか……。

「これね……、お前がやつたのか？」

「やつとも言えますし、やつじやないとでも言えます」

「意味不明……」

「因みに、素直に『テュエルしてくれば何も起きやしません』

「……受けないとしたら?」

「ああ? そのときは私にも分かりません」

逃げ道なし、か。

「いいだろ?、お望み通り『テュエルしてやる』

「フフッ、私にとつては嬉しい限りです」

全く、敬語が不気味な野郎だぜ……。

そして、この掛け声で俺達の『テュエル』が始まった。

「『テュエル!』」

そして、数ターンと30分が経過した頃……。

「リビングテッドの呼び声を発動、墓地のスクラップ・ドラゴンを蘇生。カードを一枚を伏せ、スクラップ・ドラゴンの効果発動、今伏せたカードとお前の伏せカードを破壊。そしてお前にダイレクトアタックして終わりだ!」

よし、勝った！』これで解放される。

「クツクツク……」

「何だ、何がおかしい？俺は『テュエルに勝ったんだ。早く解放しろ』

「おや、これは失敬。やはり貴方がスクラップ・ドラゴンの使い手でしたか……」

やはり？ どういうことだ？ それに、スクラップ・ドラゴンはア度の高いカードだが、使っている人は結構いるぞ？

「おい、どういってんだ？ ちゃんと説明しろ！」

「時期に分かることです。然し、ここでの事は忘れてもらつたほうが今後の都合にとってもいいことでしょう」

膝をついていた男が立ち上がりて両手を広げる。

「何をする気だ！？」

「また会つことを楽しみにしてますよ」

俺の意識が朦朧としていく中、あいつはそう言つて消えていった。クソ、まだ聞きたいことがあるのに体が動くつとしねえ。

そして俺は、完全に意識を手放してしまつた……。

プロローグ ～始まりはいつも唐突に……～（後書き）

次は近いうちに投稿したいと思います。

では、感想やアドバイスをよろしくお願ひします。

TURN1 ~全ての始まりは日常から~ (前書き)

少し早めに投稿できました。

それでは第1話、どうぞ！

TURN1 ～全ての始まりは日常から～

目を覚ますとそこは見慣れている白い天井、俺の部屋だった。眠っていたのか、俺は……。

「やつと起きたんだ」

頭を覚醒させると聞き慣れた女性の声がした。体を起こし、その声の主のほうを見る。そこにはセミロングの茶髪の俺の妹、北条真波(ひがじょうまなみ)が椅子に座って心配そうな表情で俺を見ていた。

「おはよっ、龍一」

「おはよっ……、今何時だよ」

俺の名前は北条龍一(ひがじょうりゆういち)。近くの私立高校に通っている一年生だ。

それよりも、外は暗いのにおはよっ……、何の[冗談だよ。

「7時半だよ

「7時半って……、もう夜中じゃねえか」

といふか、いつから俺は寝てたんだ？ 確か、母さんに買い物を頼まれて、それで……。

「そんなことより龍一が道端で倒れている、て聞いたとき私は母さんも吃驚したよー。」

「え、倒れていた？俺が？」

はて、そんなことあつたつけな……？

「買い物から終わつた後に倒れてたんだよ？幸い、何も取られてなかつたからよかつたものの……。私達、本気で心配したんだよ！」

「そりか……、悪かつたな……」

磨波はそれ以上何も言わない。その顔を見てるだけで俺を心配してくれてるのはよく分かる。

「……もうすぐご飯だから、早く支度しなさいよ？」

彼女はそれだけ言つて俺の部屋からでていった。

しかし、色々疑問がある。まず、買い物に行つたこと、これは覚えている。問題はその後だ。買い物したデパートからここまではそんなに離れていない。だが、帰り道のことを覚えていない。俺は襲われたのか？それにしちゃ何も取られてないのは不自然だし、第一痛みが感じない。疲労で倒れたにしちゃ寝てた時間が短いし……。

「……わかんねえもんは分かんねえか」

俺はそう納得させつて部屋を出て一階に降りた。

* * *

俺は今食事しているのだが、どうもさつきから考え方にはかり頭が行つて箸が進んでない。

「龍一、大丈夫？」

そう声をかけるのは俺の母、北条真由美ほりじょうまゆみだ。俺の通つてる高校の教師をしている。

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだ」

「本当に? きょうも道端で倒れたんだから早めに寝るのよ? 明日からは学校でしょ?」

「わあつてゐよ」

つたぐ、心配してくれんのはいいけど過保護なんだよな、俺の母さんは。

「大丈夫だよ、お母さん。龍一は平氣だつて。それよりも後で『デュエルしよ!』

「はいはい」

真波は元氣だよな、ホント。

その後、夕飯が終わつて片付けをした後、俺達は庭に出てきた。全く、冬の夜はホント冷え込むな……。

そして、デュエルディスクを腕に装着すると俺達は構えた。

「じゃあいくよ、龍一。」

「ああ！」

「「デュエル！」」

TURN1 ～全ての始まりは日常から～（後書き）

次回からトヨエルが出来そうです。

では、感想やアドバイスをお願いします。

TURN2 ～飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン～（前書き）

デュエルに当たつてのこの小説のルールは以外の通りです。

- ・ライフポイントは4000でスタート。それ以外はOCGルールです。

- ・制限、禁止リストは最新のものを使います。

大まかなところは以上です。

では、どうぞ。

TURN2 ～飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン～

龍一	L P	4 0 0 0
真波	L P	4 0 0 0

「じゃあ行くぞ。俺のターン！」

さて、真波とのデュエルが始まったわけだ。デッキからカードをドローし、それと手札を確認する。うん、結構いいほうだ。

「召喚僧 サモンプリーストを召喚。効果により守備表示に変更。そしてサモンプリーストの効果発動。スクラップ・ビーストを手札から墓地に送つてデッキからスクラップ・ビーストを特殊召喚」

初期手札にしちゃ結構いいほうだ。俺の目の前にはソリッド・ヴィジョンとして2体のモンスターが現れる。このデッキの要の一つであるビーストがこうやって出せたのは最初の段階では嬉しい。

召喚僧 サモンプリースト DEF 1600
スクラップ・ビースト ATK 1600

「あちゃー、そのデッキか……。しかもその布陣だと……」

真波は呆れている。この状態はよく見るからこの後の展開も予想出来るだろうな。

「まあな。俺はレベル4のサモンプリーストにレベル4のビーストをチューイング、シンクロ召喚！ 飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン！」

サモンプリーストが4つの光となり、ビーストが4つの輪となつて光を包む。その後、一段と輝きが1つになり強くなると俺はエクストラデッキから1枚のカードをディスクにセットした。そしてフィールド上にはその名の通り星屑の煌きを体に纏つた美しい龍が舞い降りた。

「いつ見ても綺麗だけど、やっぱりそいつかー！！」

真波は叫ぶ。それは嫌だ、という感じに。効果が時々厄介なんだよな、こいつ。レベルの割に打点が低いが、ノーコストに近い破壊無効効果がある。だから主力モンスターはこの攻撃力2500を越えるかどうかが鍵になつたりする。

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

フィールド上に裏側のカードが現れる。そしてフィールドのスターダストを見る。あれ、今こっちを向いてた？

「私のターン、ドロー！」

真波は勢いよくカードを引き抜く。元気なことだ。

「私は光の援軍を発動！」

あいつは今引いたカードを見せる。というか、それを引いたのか。俺とのデュエルだと大抵最初の手札にあるんだよな、あれ。すごい引きだと思う。

「デッキトップ3枚を墓地に送つてデッキからライトロード・サモナー・ルミナスを手札に加えるよ。そして、ソーラー・エクスチエンジを発動！ ウォルフをコストに2枚ドローしデッキトップ2枚を墓地へ。もう一枚のソーラー・エクスチエンジを発動してジェイントをコストに2枚ドローしてデッキトップ2枚を墓地に」

うわー、すごい勢いで回ってるよ、あのデッキ。最初の援軍でライニヤンとガロスとオネストが、エクスチエンジ2枚でライラとブラック・ホールとエイリンとサイクロンが落ちた。だが、墓地にはライトロードモンスターが6種類。あいつのデッキは純粋なライトロード。この状況だと……。

「裁きの龍を召喚！」

やつぱりきたか、あいつの切り札。流石、としか言えないな。

裁きの龍 ATK 3000

「伏せカードが怖いけどここは臆せず攻める！ バトル、裁きの龍でスターダストに攻撃！ ライトニング・ストライク！」

スターダストがいるから効果を使わなかつたか。そして、真波の呼びかけに答えて裁きの龍が口から光線を放つ。だが、その光線が細くなりその龍も小さくなつた。

裁きの龍 ATK 1500

「何で攻撃力が半分に！？」

「そりや、収縮を発動させたからな」

俺のフィールドのカードが一枚オープンされる。それは速攻魔法だつた。

「それを伏せてたの！？」

「意外か？ スターダストで迎撃、響け！ シューティング・ソニック！」

俺の呼びかけに答えてスターダストが口からかなり速い衝撃波をして裁きの龍を破壊した。

「あぢやあ……。メイン²でモンスターをセットしてカードを一枚伏せてターンエンド！」

真波 LP 3000

「俺のターン！」

さて、モンスターはいいとしてあの伏せカードが怖いな……。誘つてみるか。

「スクラップ・ビーストを召喚！」

フィールドにまた機械化された獣が現れる。

「そのときトラップ発動！ 奈落の落とし穴！」

やつぱりか……。

「速攻魔法、スクラップ・スコールを発動。ビーストを選択」

「それもあつたの！？」

真波は驚いているがそこまでか？ 誘つてみた俺も俺だけど……。
相変わらずひつかかり易いなあ……。

TURN2 ～飛翔せよ！ スターダスト・ミライ～（後書き）

取り敢えず、最初のデュエル前半は終了。後半は近い「ひき」ができる
と思います。

では、感想やアドバイス、間違いの指摘をお願いします。

TURN3 ～刺され！ 禁じられた聖槍～（前書き）

前回の後編です。

TURN3 ～刺され！ 禁じられた聖槍～

龍一	L P	4 0 0 0
真波	L P	3 0 0 0

「効果は分かつてゐるな？ デッキからスクラップ・キマイラを墓地に送つてシャツフル、その後ドローしてビーストを破壊する」

「奈落の落とし穴は無意味になる、と」

「そゆこと。スクラップ・スコールで破壊されたビーストの効果発動。墓地からキマイラを手札に加える」

真波は相当落胆している。そうだらうな、自分のかけた罠に引っかかるなかつたからな。

「バトル。スターダストでセットモンスターを攻撃、響け！ シュートイング・ソニック！」

一通りの処理を終えると俺は攻撃に移る。そしてスターダストに攻撃を指示すると彼は口から衝撃波を横向きの裏側のカードに放つ。そのカードは表側になると小さな犬が現れ、破壊された。

「セットモンスターはライトロード・ハンター ライコウ。デッキトップ3枚を墓地に送るよ」

「破壊しないのか？」

「スター・ダストで無効にする氣でしよう」

真波が苦笑して言つ。まあよく使う効果だからな。

「じゃ、カードを一枚伏せてターンಹンド」

「私のターン！」

さて、ここからあいつはどう動く？

「私は手札抹殺を発動！」

マジかよ！？ そのカードはかなりキツいぞ。しかも来たカードはそこまで良くない……。

「裁きの龍を特殊召喚！ そして効果を発動！」

え、あいつは何をする気だ？

「スターダストの効果発動！ ヴィクテム・サンクチュアリ！」

スターダストは一つ咆哮すると光を拡散させ裁きの龍を包み、消えていく。それは、裁きの龍も同じだが……。

「3体目の裁きの龍を特殊召喚！」

何つ！？ あいつはなんつー引きしてるんだ！？ それは流石に予想出来なかつたぞ！

「裁きの龍の効果発動！ このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する！」

「くつ！ 速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！」

裁きの龍が光を放つと同時に俺のカードが開いてそこから出た槍が裁きの龍に刺さった。痛くないのか？　いや、呻き声あげてやがる。

裁きの龍 ATK 2200

「あちやあ……。私はライトロード・マジシャン ライラを召喚してバトル! ライラと裁きの龍でダイレクトアタック! ライトニング・ストライク!」

ライアード・マジシャン ライア ATK 1700

マズい！ フィールドがガラ空きになつた以上、直接受けなきやいけない！

「うぐ」

。 うめでギリギリまで追ふたがゆくやまつキシニものがあるな

「エンドフェイズにデッキトップを7枚送つてターンエンド」

「そのとき、スターダスト・ドラゴンは舞い戻る！ 再び飛翔せよ！」

裁きの龍 ATK 3000

龍一 LP 100

真波 LP 1000

さて、スターダストがフィールドに戻ってきたはいいんだが、手札がブラック・ホールにスクランブル・スコール、強制脱出装置じゃ難しい。次のドローが問題だな。

「俺のターン、ドローー。」

俺は引いたカードを確認する。「これは……！」

「このまま終わらせる。バトル！　スターダストでライラに攻撃！　響け、シュー・ティング・ソニック！」

「え、終わらせんってどうこうこと…？」

まあ、あいつが驚くのも無理ないな。このままだとライフは200残るからな。

「2枚目の禁じられた聖槍をライラに発動！」

「…………え？」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 900

同じ槍が今度はライラに刺さる。あいつも痛そうだな。しかもお腹つて……。そしてスターダストの衝撃波が当たる。何か申し訳ないな……。

真波 LP 0

真波のライフが0になり俺の勝ちが表示されると、モンスター達が消えていった。そのとき、スターダストが俺を見てたようだが……、「氣のせいだよな？」

「……振り回されっぱなしだった」

「まあ、そういうテッキだからな」

負けて畳然とし座り込んでいた真波が最初に言つたのはそれだった。あながち間違いじゃないからな。

「じゃ、俺は風呂入つて寝るよ。少し早いが明日から学校だもんな」

「あ、そっか」

そして俺達は家に戻つていぐ。まだ10時だが、昼間のこともあるしな。

「そうだ。真波、ちゃんと勉強しとけよ?」

「大丈夫よ。貴方の高校ぐらいなら合格は簡単だから」

「あ、そう」

今会話の通り、真波は中学3年生の受験生だ。見た目は可愛いのは分かるが人の心配をそつ返さないでほしいなあ。ま、こいつは優等生だから大丈夫だろうけど……。

TURN3 ～刺され！ 禁じられた聖槍～（後書き）

取り敢えず、最初のデュエルは終了となります。如何でしたか？
では、感想やアドバイス、間違いの指摘があると嬉しいです。お願いします。

TURN 4 ～精霊 現る～（前書き）

今回の話は前の話の次の日のことです。デュエルはなしです。

では、どうぞ！

TURNA ~精霊 現る~

「じゃあ龍一、また後でね！」

「ああ。走るのはいいが、道に気をつけろよっ。」

「大丈夫大丈夫！」

俺達は今、学校に行く途中。真波とは途中まで通学路が一緒だからよくじうじて歩いている。で、その分かれ道の大通りまできた。

「さて、と……」

真波を見送った後、俺は振り返る。そこにも、否、どこを見渡しても学生やサラリーマンの姿ばかりだが俺達の来た道を見る。

「いい加減出てきたらどうだ？ 家からずっとつこて来られて少し不愉快なんだよ……」

少し大きな声で言つたからか周りの人々が驚いてこっちを見ているが俺は気にしない。少しすると周囲もまた動き出して俺のことを気にしない。

そして突然光が一点に集中して龍の形、そしてよく知っているモンスター……に？

「……え？」

そう、よく見知ったモンスター、俺の非常に気にいったドラゴンの

シンクロモンスターの2体のうちの1体、

「スターダスト……ドラゴン?」

そう、スターダスト・ドラゴンが現れた。

「いつして会うのは初めてで、になるな、北条龍一

「俺を……知っているのか?」

* * *

「じゃあ、お前の声は基本的には誰にも聞こえない、と

「そうこうことだ」

歩みを進ませながら、このスターダストがソリット・ヴィジョンではなく本物として見えるといつことに慣れてきた俺は彼と話していた。

話によればデュエルモンスターの精霊ということらしい。そういうものが見える人はそうそういない。見える原因はそういったデュエルモンスターに何かしらの大きな影響を受けること、らしい。らしい、といのも俺に何が起きたのかが分からぬ。昨日のことをしっかり覚えていたら何とかなったんだろうが……。それに彼もう1体の精霊も昨日は俺の近くにいなかつたから分からない、とのこと。というか、俺には精霊がもう1体いるのかよ、と突っ込みたくなつたが気にしない。精霊が見えるとか、アニメでもあつたな。

そうそう。この世界では遊戯王は超有名なカードゲームだ。それは

プロテューハリストがいる程に。そのため、みんなテューハルの「こと」を知っている。

「精霊が見えるなんて夢のようだ」

「夢じゃない。現実にここにいることはあるのだ」

「分かつてゐるよ」

実際に、俺の目の前にあるのは本当のことだ。夢だとは思わない。

「次いで言つておぐが、私は女だぞ」

「マジ……で？」

「マジだ」

「なん……だと……」

俺は驚愕の事実を今更に突きつけられた。

俺は奈落の落とし穴の底に叩きつけられたようだった。別に、地獄でも絶望的でもないのだがその様な感じがした。

TURN 4 ～精霊 現る～（後書き）

スターダストの性別は批判があると思います。反論はいいですが、
変えるつもりはないらしいです。

では、感想やアドバイスをよろしくお願ひします！

TURN5 ～龍一の友達～（前書き）

今回も『テューハル』です。では、どうぞ。

前回、題名がTURN5となっていましたが、正しくはTURN4でした。誠にすみません。TURN5は今回の話です。

TURNZ ～龍一の友達～

「おはよー、みんな」

スターダストが女性だという驚愕の事実から10分、家から歩いて約30分程した所の高校に着き、教室に入った。スターダストはとくに現在は物凄く小さくなつて俺の肩に乗つている。

「おーっす、龍一！」

「相変わらずおせえなあ、お前は！」

「そうか？ いつも通りだと思つんだが

俺の挨拶に眼鏡をかけた黒の長髪の男と、少し赤みがかつた髪の男が声を返す。眼鏡をかけたほうは黒木優くろきすぐる、赤髪のほうは速水翔はやみかけるという。

「おはよー、龍一！」

「のわつー？」

バックを席に下ろし、コートを脱いだと思つた矢先、後ろから抱きつかれた。バランス崩しそうになつたが、何とか保つた。こんなスキンシップするのは俺の知る限り一人しかいない。

「やつぱお前か、悠奈」

「へへへ、やつぱ龍一はあつたかい

俺に抱きついている青髪ショートカットの快活そうな女子は響悠奈だ。因みに、これはこいつなりのスキンシップ兼湯たんぽということだ。スターダストは現在、俺の頭に逃げている。当初は驚いたが今はもう慣れた。そして俺達は付き合ってるわけではない。そこ、勘違いするなよ？ 背中に感じる柔らかな感触はどうなんだ、て？ そんなもの味わうことより暑くてコートを脱ぎたい。それに、そんなことを堪能しようだなんて全く考えてないからな！

「おはよ、龍一」

「おはい、おはよひ、葵」

最後に俺に声をかけて近づいてきた栗色の腰まであるロングヘアの女子は篠宮葵。可愛いというより綺麗とか、美しいというほうが似合う少女だ。出会ったばかりはかなり冷たい態度を向けられてたけど。今でもそういうことがあるが、時々見せる笑顔はホント可愛いと思える。

因みに、「この女子」一人は校内で結構モテるほうでよく告白される。然し、一人は全部蹴っている。

そうそう。この4人も遊戯王をやつていて（当たり前なんだが）、優は光と闇を使った力オステッキ、翔はドラグニティ、悠奈は魔法使い族、葵は代行天使を使っている。

俺達は基本、この5人で行動している。みんなの仲は非常にいいほうだと思う。

俺達は会話していると程なくして担任の先生が来て朝のHRが始まります

る時間になった。

* * *

「みんなちゃんといふわね。それじゃ、今田は転校生を紹介するよ」

先生がクラスの出席を確認すると俺達にそつ報告した。それを聞いてクラスは少しづわめぐ。

「転校生？」

「誰なんだろ」「うへ。」

「格好いい男の子かな？」

「いや、可愛い女の子だー。」

まわりが色々と話しあう。どうでもいいが静かになら。

「静かにー。」

先生がやつづと周囲も静かになる。

「じゃあ、入ってきて」

静かになると、先生がそつ言つて前のドアが開く。そこから、肩につくづくの黒い髪の女子がいた。

「今日からこの学校に転入してきた倉木奈々（くらき なな）さんです」

「倉木奈々です。皿せん、よろしくお願ひします」

「質問とかあるだら「ナビ」、後で名前でしてね。倉木さんの席は響
わかこの隣が空いてるのでそこを使つてね」

「はい」

「それじゃあ、これから始業式だから体育館に行きましょ」

先生がそう言つてH.Rが終わる。面倒だが行くしかないんだよな、
体育館に。

* * *

始業式と連絡事項が終わつて学校が終わり、俺達は教室の一角に集
まつっていた。

「悠奈、お前が連れてきたのは……」

「そつ、転校生の奈々だよ。これから昼飯食べに行くでしょ？ 奈
々も一緒にいいかな、と思つて」

「皿せんが迷惑じやなければいいんですけど……」

「全然大丈夫だよー」

「寧ろ俺達のグループに入らない？」

「グループ？」

「うふ。テコエルが大好き、ヒサツを貰つたからどうかな？」

「盗み聞きか？ 悠奈」

「アレひじやないからー。」

「あ、じゃあよろしくお願ひします」

「ねえ。じゃあひじやー。」

「俺達の間じやあやんな固くなんなくていいぜ」

「そんなこんなで俺達のグループにメンバーが追加されたのだった。

TURN5 ～龍一の友達～（後書き）

最後の最後に会話ばかりになつたような気がする……。

では、感想やアドバイスのほうをお願いします。

あと、どなたかは知りませんがお気に入りに登録してくれてありがとうございます！ 引き続き読んでいただけると嬉しいです。

TURN 6 ～精靈体と実体化～（前書き）

新年あけましておめでとうございますー。今年もよろしくお願ひします。今年の目標は小説の完結を目指すことですね。

さて、新年の挨拶もそこなって、本編スタートです。

TURN 6 ~精靈体と実体化~

昼食を終えてみんなで「エルをして遊びある程度時間も経った頃、彼等はそれぞれの帰路についていた。俺は「パートの食品売り場に来て夕飯の材料を買っていた。

「うーん……」

で、俺はある物の前で悩んでいる。買い物籠を左腕にかけて両手に一個づつ持つて見比べていた。

「何をそんなに悩んでいるのだ？」

「肉をどうにしようかな、と」

そう、肉について悩んでいた。スターダストに聞かれて答えるも悩んでいた。

「そんなんに悩むことなのか？」

「悩むよー。いい？　うちの肉は量は多いんだけどこの肉は断然に質はいいんだ！」

つい大きな声で言ってしまった。然し、質は欲しいけど最近は真波もよく食つからなあ。やっぱり量のほうが……。料理に妥協は許さないのが俺の主義だ！

「……よく分からん」

* * *

「で、結局2つとも買ったのか」

「まあね。あつて損は無いし」

そう、2つとも買つてしまつた。片方しか使わなかつたとしてもどうせ明日の料理に使うだらうから大丈夫だらう。何か叔母様達や幼い子供連れの奥様達に変な目で見られていた。多分、大きな独り言を言つたと思われたんだろう。うん、周りにはスターダストが見えないことを考慮してなかつた。少し恥ずかしい。そして、買ったものをバック詰め、デパートを出ようとした。

「……つて、雨かよ。傘持つてきてないしなあ。しょうがない、走つてかえ……る？」

雨が降つていたので仕方なく走ろうかと思つたその矢先、突然声が頭に響いた。

「…………」

家とは違う方向に走つていく。気のせいならいいけど、何かそんな感じがしない。スターダストが家は違う方向とか言つて後ろからついて来てるけど、気にしていなかつた。

(た……たすけ……て)

「また、声が……」

はつきりと聞こえた。近くなのか？ そりやつて走つていくと林の

ような所に出て、そこに倒れている少女が見えた。

「大丈夫！？」

俺は近寄り、彼女の体を揺する。声が少し聞こえたから意識はあるようだが、かなり衰弱してるな。

「こいつは……！」

「事情は後！ まずは家に運ぼう！」

そう言つて俺は彼女を抱えて走つて家に向かつた。勿論、彼女の近くに落ちていた遊戯王のカードも一緒に。

* * *

(やつぱりそなのか？)

「ああ、間違いない。あの娘も『デュエルモンスターズの精霊だ』

家に連れてきた後、彼女には風呂に入つてもらつた。途中で意識を取り戻したから騒がれるかと思ったが、驚いた目をしたがすぐに警戒心を解いた感じだった。そして素直に俺の言つことに従つてくれた。

で、何故俺が言葉を出さずにスタートに話しているのかというと、隣に真波がいるからだ。彼女は精霊のことを知らない。だから口に出す訳にいかなかつた。

(そう言えば、精霊の実体化って君も出来るの？)

彼女をここに運んだ後、1つ疑問があった。精霊体であれば俺にしか見えない。だが、彼女は真波にも見えた。ということは、実体化している、ということになる。精霊化だと、俺だと触れるが真波は何も見えず触れない。現にスターダストもそうだ。

「確かに出来るが、人型でないから難しい」

(変身能力でもあるの?)

「似たようなものだ。最近じゃそれが出来なくなつたが別に気にする事もないけどな。それと、彼女はもとより人型の精霊だから」

何か色々ややこしいな。

「あの、お風呂あつがとつぱれこました」

そんなこんなで時間が経つと風呂場から出て真波の幼い頃に来ていた服を着て少女は現れた。どうやらお風呂からあがつたようだ。

「大丈夫だった?」

「はい。あの、わざわざ助けて頂いてありがとうございました」

「どういたしました」

真波は心配して彼女に近寄る。いつも過保護なんだよな。そして彼女は丁寧にお辞儀までして俺にお礼を言つ。別段特別なことはしないはずだけど……。

「単刀直入に訊くけど、君の『デュエルモンスターズ』の精霊だね？」

真波が関係ない。彼女ることは色々知つておかないといけないからな。当然、真波は驚いている。

「龍一、どうしたの？ 頭でも打つた？ 彼女は現実にここにいるのよ？ そんな非常なことがあるはずが……」

「貴方の仰る通りです」

「そうそう、仰る通り……って、え？」

真波は再び驚く。それはそうだろう、自分の思つてもみなかつた答えが来たのだから。

「貴方の仰る通り、私は『デュエルモンスターズ』の精霊です！」

彼女の言葉を聞いてやつぱりと言つ俺と、驚きの余りにその場から動けない真波がいた。

TURN 6 ～精靈体と実体化～（後書き）

龍一の趣味の一つは料理です。下手をすると趣味の域を超えてるかもしれない。彼の家族で料理するのは龍一か彼の母親のどちらかです。

では、感想をよろしくお願ひします。

TURNER ~ ハフカト・カーラー (前書き)

「JERICHO」が無いのも珍しい気がする。

では、本編を読み。

TURN ~HFFECT・VHRL~

俺が助けた少女は青い長い髪と金色の目、今は違うがボロボロだった白い服、そして何より今は消しているが背中にある透明感のある翼のようなもの。落ちていたカードのイラストから、俺は彼女の正体をそれを取り出して言う。

「貴女はエフェクト・ヴーラー……、そうだよね？」

「はい、その通りです」

彼女、エフェクト・ヴーラーはにこやかに笑つて答える。

「あの、本当にありがとうございますー、わざわざ助けていただきただけでなく私のカードまで拾つていただきて……。本当、何と申し上げれば……」

「は、はあ……」

ここまでお辞儀もして丁寧に言わると何と言えば分からん。別に特別なことは何もしてない……はずだ。

「あのー、未だによく分かんないですけど……」

真波は申し訳なさそうに手を上げてそれを伝える。そりゃ、分かんないことだらけだよな。

「ええと、つまりですね……」

* * *

「……とこ'う」とになります

「要するに、デュエル・モンスターーズの精靈は本当にいて、貴女はその一人。普段は見えないけど、こうして一般人に見せることが出来、そして龍一は普通に精靈が見える、と」

「もうこ'う」とです

エフェクト・ヴェーラーが説明し、真波が要約し理解する。まあ、理解しづらいが現実なんだし信じるだろつ、こいつも。

「あの、もしよろしければ貴方の傍にいてもいいですか？」

エフェクト・ヴェーラーがこ'うちに近づいて俺に言つ。顔が目の前に迫ってきて少々吃驚したが特に問題はない。

「いいよ」

「本当ですかー!？」

「別に断る理由無いし」

さて、カレーでも作るか。

「ちょっと待つて龍一！　お母さんこ'moじつ説明するのー!？」

部屋を出ようとした俺を引き止めて訪ねる。というか、そんな心配

してたのかよ。

「大丈夫だよ。眞実を言えばちゃんと信用する、て」

ソウヒで部屋を出る。

途中、真波がそういうもんなのかなあ、と呟いていたが、そういうもんなんだよ、うちの母さんは。

…………過保護だけど。

* * *

夕飯を作っている最中に母さんも帰ってきて4人でカレーを食べた後、風呂を済ませて俺は自室にいた。今はティックを考えている最中だった。

エフェクト・ヴォーラーも俺の自室にいる。理由は彼女が俺と一緒にいたいと懇願し、母さんと真波が大丈夫といつ信用のもとでこうなった。というか、どんな信用だよ。俺も男なんだから少しは警戒してもらいたいもんだ。幼女の趣味は俺にはないがあいつは可愛いんだから下手をすると、こういうこともあり得る。ま、ないだろうけど……。

「マスター……」

「ん、ビウした、ヴォール？」

ヴォールといふのはこのエフェクト・ヴォーラーの名前だ。俺が長いからといふ理由で短くしたらビウゼラ気に入つたようだ。そして

彼女は俺のことをマスターと呼ぶ。いつも特に気にすることはないからいいが。

「してもどうしたんだ？ 急に真剣な表情で……。

「訊かないんですか？ 私があそこで倒れていた理由を……」

「ああ、そういうことか。

「別に言いたいも言えぱいい。そういうじゃないなら言わなくともいい」

確かに大切なことだが無理に訊くこともない。

「じゃあ、言いません」

「やうか

彼女はそう言って彼女用に用意したベッドに潜り込む。あの様子じやあ辛いこと何だらうな。

「お休みなさい、マスター」

「ん、お休み」

そうして暫くして寝息が聞こえてきた。よっぽど疲れてたみたいだな。

次の日から彼女もスターダスト同様に俺について来て学校に来る。勿論、精霊体になつて。学校の授業が何言つているか分からぬと言つていたがそれが普通だと思つ。

TURN 7 ~エフェクト・ヴォーラー~（後書き）

エフェクト・ヴォーラーは男性なのか女性なのか分かりづらい。取り敢えずこの話では女性として進めようと思っています。

次回からデュエルが出来るといいかな、と思っています。

では、感想やアドバイスをお願いします。

後、登場人物の詳細とか書いたほうがいいですか？ よろしければそちらのほうのアドバイスもお願いします。

TURN 8 ~炎の進化する道~ (前書き)

久々のテコホールです。では、じりぞー！

TURN 8 炎の進化する道

「わりい、待つたか？」

「ううん、まだ大丈夫だよ」

「にしてもお前は相変わらずおせえなあ！」

数日経過し、休日となつた俺達は町内のカードショップに来ている。理由は簡単でここで開かれる大会に出るためだ。大会と言つても小さなやつで、これに優勝したから賞金が出たり、プロデュエリストのスカウトが来るとかそういうことはない。確かに優勝すればカードが数枚貰えるが、それくらいだ。

で、その大会に出た俺達6人グループを含めた16人のデュエリスト。一回戦が始まり、俺以外の5人は一回戦に駒を進めた。俺はこれから最終戦をやろうとしていた。

「頑張れよ、龍一！」

「頑張れよー！」

「負けないでね！」

「ま、あんたら心配ないでしようけど

「少しほ応援しないのー?」

後ろから声援が聞こえる。そして奈々、葵はいつものことだから大丈夫だ。

ARヴィジョンのリンクも完了し、対戦相手も構えている。さて、やるか。

「「テュエル！」」

男 LP 4000
龍一 LP 4000

「俺のターン！」

相手から始まる。さて、どんなテッキだ？

「俺は異次元の生還者を召喚！ 次元の裂け目を発動しカード2枚伏せてターンエンドだ」

異次元の生還者 ATK 1800

そうして相手はターンを終わらせた。次元テッキとはまた厄介なものを。然し、これには関係ないけどな。

「俺のターン！」

手札と引いたカードを確認した。まあよしと言つべきか。

「サイクロンを発動、その右の伏せカードを選択する」

「なら魔宮の賄賂を発動！ 無効にする！」

あら、無効化された。重要なカードといふことか？俺は新しく引いたカードを確認する。やることは変わらなそうだ。

「エヴォルド・カシネリアを召喚！」

エヴォルド・カシネリア ATK 1600

俺のフィールドに赤い尻尾に緑の螺旋が入った爬虫類が出てきた。俺は動物に詳しくないから説明しづらい。

「バトル。カシネリアで生還者を攻撃！」

周りが驚いた声をあげる。普通はそうだらうけど……。

「ダメージステップ、収縮を発動！ 生還者の攻撃力を半分に」

「何つ！？ ぐう……」

異次元の生還者 ATK 900

生還者は小さくなりカシネリアに噛まれ破壊される。

男 LP 3300

「バトルフェイズ終了時、カシネリアの効果発動！ リリースしテッキからエヴォルダー・ケラト2体を特殊召喚！」

カシネリアが2体の恐竜に姿を変える。

「そしてこの2体でオーバーレイ！　エクシーズ召喚！　吠え盛れ！　エヴォルカイザー・ラギア！」

エヴォルカイザー・ラギア　ATK　2400

ケラト2体がそれぞれ赤の光の球となり、一つとなる。そしてエメラルドグリーンの龍が現れ、その周りに2つの赤い球体が漂つている。

「カードを2枚伏せてターンエンダ」

「そのときに生還者は俺の戻つてくるー」

異次元の生還者　ATK　1800

相手のフィールドに生還者が戻つてくるがどうでもいいか。

さて、こいつ相手にどういへる？

TURN 8 ～炎の進化する道～（後書き）

少し表現を変えてみました。そんなに重要なことではないので気にすることはありませんが。

では、感想をお待ちしております。

TURN 9 ～吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア～（前書き）

さて、前回の続きです。では、どうぞ。

TURN9 ～吠え盛れ！ エヴォルカイザー・ラギア～

男 L P 3300
龍一 L P 4000

「俺のターン！ ドロー！」

さて、どう来るんだろうか？ 相手の様子を見ると思わしくない。いいカードじゃないのか？

「モンスターをセット、生還者を守備表示にしてターンエンドだ」

異次元の生還者 D E F 200

「俺のターン」

何もしてこなかつたか。引いたカードはウェストロか。

「このままバトル！ ラギアでセットモンスターを攻撃！ エヴォリューション・フレア！」

ラギアの放った炎がセットモンスターを包む。それが表側になるとモンスターが現れ破壊される。名前は分かるが説明しづらい。

閃光の追放者 D E F 0

「モンスターをセットしてターンエンド」

さて、どうしたものか。

「俺のターンだ！ ドロー！」

引いたカードを見てにやけるのが見える。動きそうだな。

「ガーディアン・エアトスを特殊召喚！」

ガーディアン・エアトス ATK 2500

フィールド上に翼とどこかの民族衣装のようなものをつけた女性が現れる。確かにいい、だが……。

「^{トリップ}罠発動！ 奈落の落とし穴！」

彼女の下に落とし穴が現れそこに引き寄せられるように落ちていく女性。あの飾りなのか！？ 飛べないのか！？ どうゆう仕組みなの、あれ！？

「くそっ！ 永続罠、マクロコスモス！ そして魂の解放を発動！
俺の墓地の魔宮の賄賂を除外！」

墓地のカードを除外して空にして何する気だ？

「俺の墓地にカードが無く4枚以上カードが除外されているからカオス・グリードを発動！」

成程、そういうことか。ならば…

「それは止めさせてもらひう！ ラギアの効果発動！ このカードの

エクシーズ素材2つ使い、魔法・罠の発動及びモンスターの召喚・特殊召喚を無効にし破壊する！」

「何っ！？」

「ソウル・クラッシュユ！」

ラギアが2つの球を食い、それをエネルギーにして相手のカードを破壊する。それより、こいつを知らないのか？有名だと思ったんだが。……嫌な意味で。

「……ターンエンド」

「よし、俺のターン！」

「これで決められるな。

「エヴォルド・ウェストロを反転召喚！そしてリバース効果発動！ デッキからエヴォルダー・ディープロドクスをデッキから特殊召喚し効果発動！ エヴォルドによつて特殊召喚されたのでマクロコスモスを破壊！」

エヴォルド・ウェストロ ATK 700
エヴォルダー・ディープロドクス ATK 1600

緑のトカゲと恐竜が出てくる。さて、ここまでやったが全然やる必要のないことがある。まあ、ディープロドクスは強制効果だから仕方ないが。

「バトル。ウェストロで生還者を攻撃！」

ウェストロが生還者に噛む。然し、小さなトカゲに人が殺されるのも珍しいが毒でもあるのか？

「ディプロドクスとラギアでダイレクトアタック！ エヴォリュー
ション・フレア！」

「ぐわああああ……」

男 L P 0

2体が相手を攻撃して相手のライフをゼロにする。さて、一回戦は勝利か。

「いやあ強かつたぜお前！ 手も足も出なかつたぜ！」

周りのARヴィジョンが消え、それと同時に対戦相手の男が近づいてくる。

「次も頑張れよ！」

「はい！ ありがとうございました！」

相手と握手してフィールドを離れる。今回は幸先いいな。一回戦は誰になるかな。

「お疲れ～！」

「相変わらず強いな～！」

「今日は新しい『テッキ』?」

「ま、そういうことだ」

みんなのものとに戻り色々と話す。そう、今回使った『テッキ』は昨日作つたものだ。最初にまわしてみたけどどううまくまわってよかつた。大会は一つしか『テッキ』を使えないが、初めてにしてはよかつた。

さて、次が楽しみだ。

TURN 9 ～吠え盛れ！ ハヴォルカイザー・ラギア～（後書き）

技名に疑問しかない。うん、 じつにう本能も無いのでどうしようもない。

さて、愚痴はこれからもよろしくお願ひします。

では、感想待つてます！

では、また次回！

トーリー　～おまつにでも味気なかつた。うふ、そんな気がする～（前書き）

「トーリーの内容は余りにも醜いですね……。こつものじとか。
ソルティを並べてみた」と思つたら「こんなことになりました。

TURN10 ～あまりにも呆気なかつた。うん、そんな気がする～

「俺はエヴォルダー・エリアス2体とエリアス、エヴォルダー・テリアスでオーバーレイ！ エクシーズ召喚！ 燃え盛れ！ 2体のエヴォルカイザー・ソルデ！」

エヴォルダー・エリアス	DEF	2400
エヴォルダー・テリアス	ATK	2400
エヴォルカイザー・ソルデ	ATK	2600

「これでターンエンド！」

翔	龍	—
LP	LP	4000
4000		

二回戦も順調に勝ち進み、俺達は今準決勝をやつている。相手はドラグニティ使いの翔だ。先行1ターン目で手札を1枚にしてしまつたけど俺のフィールドには現在青い龍、ソルデが2体いる。あのティックでは対策は難しいはずだ。で、現在俺はあいつに怒っている。理由は言わないでおくけど。

「俺のターン、ドロー！」

さあ、地獄の始まりだ！

「どんな強力なモンスターを並べてもこいつには無意味だ！ ブラック・ホールを発動！」

フィールド上に黒い巨大な渦が巻き起^ひる。ソルテは周^うりに漂つている球体にバリアを張らせて嵐が止むまでその身を守っていた。

「何故破壊されない！？」

「フフツ、ソルテはエクシーズ素材がこのカードにある限りカードでは破壊されない」

「なん……だと……？」

「おお、驚いてる驚いてる。だが、恐怖はまだこれからだぜ！」

「なら戦闘で破壊するまでだ！ 龍の渓谷を発動！」

風景が夕暮れ時の谷間に変わ^わっていき、龍やら鳥やらが飛んでいるのが見える。あいつのホームグランドになつたか。

「そして効果を発動し、手札からドラグニティ・ファランクスをコストにデッキからドラグニティ・ドウクスを加えてそのまま召喚！ 効果発動して墓地からファランクスを装備！ そして装備カードとなつたファランクスを自身の効果で特殊召喚！」

ドラグニティ・ドウクス ATK 1500 1700

ドラグニティ・ファランクス ATK 500

翔のフィールドには現在白い鳥人が小さな龍に乗つてくるが、来た途端にドウクスが降り立ちファランクスが並ぶ。

「そしてレベル4のドウクスにレベル2のファランクスをチューニング！ シンクロ召喚！ 飛躍せよ！ ドラグニティナイト・ヴァ

ジコランダ！

ドラグニティナイト・ヴァジコランダ ATK 1900

そして何も知らずにその2体を一つさせ赤い龍を出してきた。うん、もういいや。

「ヴァジコランダの効果発動！墓地の……」

「はいはい、ソルデの効果発動。エクシーズ素材1つ使い特殊召喚されたモンスターを破壊する。ビッグバン・インパクト！」

赤い龍は出てきたとき何かを呼び出そうとしていたが、ソルデが炎で攻撃して破壊した。翔は驚いているが、確認しなかつたあんたが悪いと思う。

「……ターンハンド

「じゃあ俺のターン、ドローしていくのままバトル

翔が怖がっているけど気にしない。俺は今凄くイライラしてるんだ。

「あの～……」

「ん、なあに？」

翔が何か言いたそうにしてくる。聞くだけは聞いてやるわ。

「わかったの……聞こえてた？」

「ああ

「やつぱつ怒つてこりつしゃこめたへ。」

「今頃氣づいたの?」

俺はトーンを下げて囁く。何が原因であんなことになったのか知らないいけど、俺はそれが大嫌いだと何回も囁いてるよねえ。

「誰に女装させたい、つてえ?」

「わよ、壇元出しのー。」

「ワザと出してるんだよ?」

「ひこー……」

周りが怯えてるけど氣にしない。確かに俺は女顔だし黒い髪はさらさらで少し長いし声も高いことは自覚あるよ? でもね、でもね……。

「こべら[冗談でも囁つてこここと]どがあるよねえ?」

「じつもすこませんでしたーー。」

翔が土下座してくるけど許す氣はないよ? 何回も囁いてるけどだし。

「……チヨシテ……頭冷ヤソウカ?」

「匂……」

「ソルデ2体でダイレクトアタック！ エヴァリューション・ストリーム！」

「許す気無しかよ！？ つて、うわああああ……」

ソルデ2体が翔に炎を放つて攻撃する。そして彼のライフをゼロにした。

翔 LP 0

そして、デュエルが終了しヴィジョンが消えていった。

「くそつ、次元幽閉伏せるの忘れてた！」

.....。

「反省してないようだね、翔？」

「え……」

「後でオハナシしようか」

「い、いえ……。慎んで……」

「確定事項、だよ？」

「……はい」

うん、漸く黙ってくれた。

さて、次はいよいよ決勝。相手は葵。代行天使に勝てるかな？　ま、
全力でいくだけだな！　楽しみだ！

TURN10 ～あまりにも呆気なかつた。うん、そんな気がする～（後書き）

さて、漸く主人公の姿を書けました。そして無理矢理感MAXだけど、気にしません。

龍一を女顔にしようか迷いましたが、結局やつすらむことにして龍一を暴走させました。

さて、それではまた次回！

TURN11 → 駆け引きせよ上手に～（前書き）

このデュエルもかなり一方的な気がしてきた……。では、小さなデュエル大会の決勝戦、どうぞ。

TURN11 → 駆け引きは上手に→

「俺はエヴォルカイザー・ラギアをエクシーズ召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

「私は神秘の代行者 アースを召喚。効果発動してデッキから創造の代行者 ヴィーナスを手札に加えてカードを1枚伏せてターンエンド」

エヴォルカイザー・ラギア ATK 2400

神秘の代行者 アース ATK 1000

龍一 LP 4000
葵 LP 4000

現在、決勝戦を行っている。相手は代行天使を扱う葵。俺のフィールドはラギア1体と伏せカードが2枚、葵にはアースが1体と伏せカードが1枚、手札は5枚。

「俺のターン」

さて、3ターン目に入り、手札は4枚になるわけだが対処が難しい。伏せカードはともかく手札にオネストがあると厄介だ。誘つてみるか。

「エヴォルド・カシネリアを召喚してバトル、カシネリアでアースを攻撃!」

さあ、どうくる？ アースが破壊出来れば上々、オネストが出てく
れば儲け物だ。

「罠発動、攻撃の無力化！ その攻撃を無効にしてバトルフェイズ
を終了させる」

「……」

そうきたか。カシネリアが突進するが突如現れた渦に足止めされ
しまつ。スペルスピードの関係上、ラギアの効果は発動出来ない。

「ターンエンド」

「じゃあ、私のターン、ドロー！」

さてと、「ここからの」とは大体予想出来る。然し、それ通りに来る
か……。

「創造の代行者 ヴィーナスを召喚！ そして効果発動、ライフを
500 扱つてデッキから神聖なる球体を特殊召喚！」

創造の代行者 ヴィーナス ATK 1600
神聖なる球体 DEF 500

来たか。いつも通りまわってるな。だが、そうはいかない。

「罠発動、連鎖除外！」
チーン・ロスト

「え……？」

葵は相当驚いている。まあ、普段使つことは少ないからいきなりで吃驚したんだろうな。

「効果は分かつてゐるよね？ 攻撃力1000以下の神聖なる球体が特殊召喚されたのでそいつを除外。更に同名カードが手札・デッキにあればそいつも除外するよ」

「……手札にはないわ。確認して」

彼女がそう言うと5枚の手札が目の前にパネルとして表示される。クリスティアにヒュペリオン、死者蘇生に和睦の使者とジュピターか。オネストは無いし、これなら対処は簡単だ。そしてデッキから2枚の球体が除外される。そうすると目の前のパネルが消え、次の行動に移った。

「だつたら、レベル3のヴィーナスにレベル2のアースをチューング！ シンクロ召喚！ 癒やせ！ マジカル・アンドロイド！」

二人の代行者が1つになると今度は色とりどりの服を着た女性が現れた。これは……。

「ラギアの効果発動！ その特殊召喚を無効にする！ ソウル・クラッシュ！」

流石に相打ちなんて狙われたら堪つたもんじやない。それだけは避けないと……。

「そう。でも、先程の手札を忘れた訳じゃないでしょう？ 墓地のヴィーナスを除外してマスター・ヒュペリオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK 2700

葵のフィールドに今度は太陽の化身みたいな人が現れる。忘れてたわけじゃない。そうじゃなきゃさつきラギアの効果を使つた意味がない！

「罠発動、奈落の落とし穴！ ヒュペリオンを除外する！」

「……！」

ヒュペリオンは穴の中に落ちていく。ニアトスといい、背中についでのは飾りなのか？ 飛んでかわせないのか？ 別の力でも働いてるのか？ そして葵は驚きを隠せてないようだ。

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

今伏せたのはやつぱりあれか？

「俺のターン」

引いたカードを確認する。このターンには終わらないか。

「カシネリアをリリースし強制進化を発動。デッキからエヴォルダー・テリアスを特殊召喚。この召喚はエヴォルドと名のついたモンスターによる特殊召喚になるのでテリアスは効果で攻撃力が500下がるが、それは関係ない。死者蘇生を発動し、お前の墓地のアースを特殊召喚！」

「アースを、蘇生？」

エヴォルダー・テリアス ATK 2400 1900

神秘の代行者 アース ATK 1000

葵がアースを蘇生したことに驚いているが、必要なのはチューナーだ。このレベルの合計ならあいつが出る。

「俺はレベル6のテリアスにレベル2のアースをチューニング！シンクロ召喚！」

恐竜と代行者が1つになつて見慣れているあの龍の姿となる。

そり、出すのは俺の一一番最初からの相棒だ！

「唸れ！ スクラップ・ドラゴン！」

不思議な光を放つて俺の相棒の体は現れた。

TURZ11 → 駆け引きせよ上手に〜（後書き）

やつぱり一方的な気がする。なかなか上手く書けないものです。

それではまた次回もよろしくお願ひします！

TURN12 もう一體の精霊、忍れ！ スクラップ・ドラゴン→（前書き）

どうにかテュエル大会完結。では、どうぞ。

TURN12 もう一體の精霊、忍れ！ スクラップ・ドラゴンへ

龍 — LP 4000
葵 LP 4000

俺のフィールドに現れたのは昔からよく使つてゐる屑鉄の龍、スクラップ・ドラゴンだ。色々なデッキで使つから活躍の場は結構あたりする。あれ、こつち見てる？

「ほつ、精霊を視認出来るよつになつた話は本当か」

「うわ、喋つ……た？ 今こいつ何て言つた？ まさかこいつが……。

「スターダストの言つてたもう一體の精霊、て……」

「それは我のことだな」

成程、漸く理解した。だからこつは俺に向かつて話しかけてるのか。

「どうしたの？」

暫く動かない俺を不審に思つたのか、葵が話しかけてくる。端から見たら独り言言つてるようになつてしか見えないからな。

スクラップ・ドラゴン ATK 2800

「悪い、スクラップ。つもる話は後で

「了解した」

「バトル、スクラップでダイレクトアタック！ クラッキング・レイ！」

スクラップは口を開くとそこからエネルギー弾を打ち出して攻撃した。だが、あの伏せカードは……。

「罠発動、和睦の使者！」

やつぱりそうか。スクラップの効果を使わなくて正解だつたな。さつき手札確認したからなんだけど。そしてバリアが現れ葵を球から守った。

「バトルを終了し、カード1枚伏せてターンエンド」

さて、どうくるだろうか？

「私のターン」

フィールドは空っぽだが手札がある。何が来る？

「大天使クリスティアをコストにワン・フォー・ワンを発動、デッキから勝利の導き手 フレイヤを特殊召喚、そして死者蘇生を発動して墓地から……」

「神の宣告を発動、ライフ半分払つて死者蘇生を無効しする！」

「……！」

勝利の導き手 フレイヤ ATK 500

龍一 LP 2000

何つー引きだ、一瞬焦つたぞ。でも、だいぶやりやすくなつた。

「なら奇跡の代行者 ジュピターを召喚！ 効果発動して墓地からアースを除外して……」

「手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動！ その効果を無効にする。アビリティ・バインド！」

「……」

奇跡の代行者 ジュピター ATK 2200

葵のフィールドにまた代行者が現れ、手から光を放つていたがそれをヴェールがバインドをかけて封じた。葵は何も言えないようだつた。ヴェールは少し生き生きしてるが、何故？

「……ターンエンドよ」

「ん、俺のターン」

葵に手札は無し。引いたカードは化石調査か。

「カードを伏せて、スクラップ・ドラゴンの効果発動、俺の伏せカードヒジュピターを破壊する、ミューチャル・ディストラクション！」

「！」

そつ言うとスクラップが咆哮して俺のカードとジュピターが破壊されていった。

「バトル、ラギアでフレイヤを、スクラップでダイレクトアタック！ エヴォリューション・フレア！ クラッキング・レイ！」

ラギアとスクラップがそれぞれ攻撃することで葵のライフを一気にゼロにした。

「フウ……」

デュエルが終わると同時に葵がその場に座り込む。どうしたんだ、急に？

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ。そのデッキとデュエルして疲れたのよ」

「…………」

何か今酷いこと言われた。一生懸命頑張つて考えたデッキなのに！ まあ、否定はできないかもしねけど……。

そして、その日のそこの大会は俺の優勝で幕を閉じた。勿論、優勝賞品のカードは貰つたよ？ 何故か5枚もあって吃驚したけど……。賞品をこんなに多くして大丈夫なのかなあ？ ま、俺はそこまで大会に出たいとも思わないしな。というか、こいつやって出るほうが珍しい、というより今までなかつた。こいつらと会つてからは……。大会は今まで見ることだけだつたからなあ。

悠奈や優がしつこすぎて今回は出ただけ。いや、いつもしつこく誘つてくるし、今回は仕方なかつた。うん、それだけだ。

TURN12 もう一休の精霊、忍れ！ スクラップ・ドラゴン～（後書き）

最後のはうはエヴォルが関係無くなつた気がしてしょうがないです。
もしかしたらまたいづれ使うかもしれません。

では、また次回もよろしくお願いします！

TURN13 ～大会終了後の夜～（前書き）

今回は「テコハル無し」。色々おかしいところが出てくるかと思います。
最後のほうにおまけがありますが、そこは別に読まなくともいいです。

それでは、どうぞ！

TURN13 → 大会終了後の夜

「やつぱり違うよな……」

町内のショップの『テュエル大会も終了し、頃合いを見計らって俺達はそれぞれ帰路についた。そしてその夜、俺は優勝賞品のカードの5枚のうちの1枚を見ていた。

「でも氣のせいかな……」

さっきからこれの繰り返しだ。そのカード、カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - のことなんだがどうもおかしい。どこが変かと言われると言えないけどそれでも何かがおかしい。リア度とかイラストのことではなく、全体的な雰囲気とでもいいくべきか。説明しづらい。

「……わっかんね」

俺はその開闢をとある『テック入ったのケースにしまうと別の4枚を取り出した。開闢に気をとられて他のカードを見てなかつたがこっちも相当豪華だ。

「強欲で謙虚な壺に、ヴェルズ・ウロボロスにダイガスター・エメラル
にラヴァルバル・チエイン……」

……。

おいおい、何つー豪華なカードばかりだ。洒落になつてないよ。取り敢えず強謙はデッキに入れてウロボロスにエメラル、チエインは

エクシーズのカード群に入れておこう。既に1枚づつあるけど複数枚必要になることも考えられるからな。……ないと思うけど。

「さてと」

それらのカードをしまつと今度は精靈の宿つている3枚のカードを取り出した。そうそう、精靈の宿るカードはある程度決まっているらしく、同じ種類でも別のカードに宿ることは無いみたいだ。特別な事情があれば別みたいだが。

特にスクラップ・ドラゴンに宿っていたことは吃驚したけど、同時に嬉しくも思った。だって、親父から最初に貰った遊戯王のカードだからな。思い入れもあるし兎に角嬉しい。因みに、あれから精靈の宿るカードは毎日持ち歩くようにしている。ヴェールに至っては寂しがりやで基本的に放さないようになっている。甘えたい時期だといつのもある。

これからはこの部屋も賑やかになるな。

おまけ ～龍一とヴェールのある会話～

台詞だけなので台詞の前に名前が書いてあります。

龍一 「そういうやヴェール、あのときかく生き生きしてた見えたが何かいいことあつたのか？」

ヴェール 「あのときつていつですか？」

龍一 「葵と戦ったとき。ほり、ジコピターの効果を無効にしたときだよ」

「あああのときの… 単に使つてもうひとつ嬉しかっただけですよ！」

龍「……………」

「ああやつてちゃんとマスターに使つてもうえて私、すごく嬉しかったんです！ 保護してくれたマスターには本当に感謝しています！」

龍「お、おお……（そこまで頭を下げられると何だかこっちも少し嬉しいような……。それにすぐ可愛くて和む。うん、もつといじめた……いや、よろしくない。でもやつぱりいじめ……いや、ダメだ……でも……）」

「（黙り込んでますが、何かあったんでしょうか……？）

おまけ 終わり

TURN13 ～大会終了後の夜～（後書き）

龍一はただ単にSです。しかも怖いことに普段はそんなところを表にしなく、余り気づかれない上に質の悪いほつだと思います。まあ、基本的にこんなことはないので大丈夫だと思いますが…………。

それではまた次回！ いつになるかは知りませんが…………。

TURN14 ～精霊界へ～（前書き）

取り敢えず更新です。今回も「コエル無し」です。では、どうぞ！

TURN14 ～精靈界へ～

俺は今混沌空間カオス・フィールドという所にいる。え、そこはどこだ、て？ 遊戯王のフィールド魔法の一つ、そしてデュエルモンスターZの精靈界でもある。何でそんなところにいるんだと聞きたいだろうな。それを教えるために少し時間遡る。

* * *

大会から数日後のある平日……別にサボりじゃないからな？ 高校受験の日だから生徒は休み。今学校は受験生が筆記試験を受けている。明日はデュエル実技試験、その次の日も休み。所謂、高校受験における休みというわけだ。本来ならみんなと遊ぶ約束があつたんだが、ヴェール達にあるカードを持って精靈界、混沌空間に行つてほしいと言われたので現在ここにいる。

「で、ヴェール。呼び出した理由は何だ？」

実際、何故ここに来ることになつたのかは知らない。傍にはヴェールにスターダスト、スクラップがいる。

「はい、ここで暴れている人を止めてほしいのです」

「誰を？」

「それは……」

ギャアアアアアアアアアアア

「　「　「　「！？」「　「

何だ今のはー？ 悲鳴のように聞こえたけど何事ー！？

「またあいつが暴れているのかー？」

「あいつ？ 誰のことだ？」

「疑問はあるだろうが私の背中に乗ってくれ」

「分かった」

確かに疑問は残るが今はスターダストの言う通り俺は彼女の背中に乗る。そして、ヴェールも俺に捕まってスターダストとスクラップは声が響いてきた場所に飛び立った。

「……異次元の女戦士に力オス・ソーサラー、ダーク・アームド・ドラゴン……。みんな、相当傷ついてやがる……」

かなりの距離を飛んだどうか、それでも目的地にはまだ着かない。その間に様々な光属性や闇属性のモンスターがボロボロになつてそこら中に倒れていた。

「ライトパルサー・ドラゴンにダークフレア・ドラゴンも……

「余りにも……酷いです」

「噂以上に酷くないか？」

「見えてきたぞ、その問題の精靈が！」

目的地に近くになり傷ついた精靈もドンドン多くなってきてる。そしてその中で唯一そこに仁王立ちしている蒼色が基調の金色の入った鎧、仮面、盾、そして銀が眩しい剣。そこにいたのは間違いない。ヴェール達に持ってきてほしいと言われ、先日の大会で貰ったカードを持ってきたそのイラスト通りの精靈。そして感じた違和感はこれだったのかもしれない。

「カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ……」

……そう、余りにも強大すぎる力だったのかもしれない。

「ふん、こんなものか。……つまりん」

彼はそう呟く。その周りで倒れている精靈は痛々しい傷が沢山見え、呻き声が聞こえる。

「1Jの程度では駄目だ！ 私は……もっと、もっと力が欲しい……」

今のははつきり聞こえた。力を求めているのか、こいつは？

「カオス・ソルジャー！ 何故このようなことを…」

ヴェールは威勢よく飛び出して彼の前に飛び出して怒る。然し、開闢はそれを気にせず彼女を睨む。

「何だ貴様は……？」

「ひ……！？」

逆に追い返される始末だ。彼女は恐怖で俺の後ろに逃げ隠れてしまった。

「ほう……。貴様、人間か？」

俺を睨みながら威圧感をかけてそう言つてくる開闢。一いつ、何があつたんだ？

「しかも私のカードを持っているのか」

どうやらそのことにも気づいたようだ。俺も薄々気づいていた。スタークストやスクラップも同じようだ。

「そうだけど、何故このようなことを？」

「私には力が欲しい！　何にも負けぬ強大な力が！！」

さつきから呟いているのが聞こえていたからもしかしたら、と思ったが、その通りらしいな。

「じゃあ、デュエルしようよ」

「何？」

「『』にあるんだろう？　デュエルは、だったら俺を倒してみるよ！　そうすればその力とやらも見つかるかもしれないぜ？」

仮にもデュエルモンスターズの精霊界だ。それぐらいはあるはずだ。余りやりたくない方法だが仕方ない。それに、困っている奴等が沢

山いるんだ。見逃せない。

「いいだろう。私も人間に興味があつたところだ。面白い！」

「どうやらのつてくれたか。よかつた。俺はスター・ダストから降りてデュエルディスクをセットし、ロゲイザーを装着する。

「大丈夫か？ 龍一」

「ん、何が？」

後ろから心配する声が聞こえてくる。どうしたんだろうか？

「何が、じゃない！ あんな根拠の無いことを言つて……！」

「ああ……。大丈夫、勝つよー。」

俺をそう言つて前を向き、構えた。

「「デュエル！！」」

龍一 L.P. 4000
開闢 L.P. 4000

TURN14 ～精靈界へ～（後書き）

次回は「コホールです。前回の「ガヴォル（？）」ナツキでは無いことだけは言つておきます。うん、ぶつ飛んだような気がしてならない。

では、次回もお楽しみに！ 感想等もお願いします！

TURN15 ～VSカオス・ソルジャー（前編）！～ 求める力の為に～

今日はテュエルです。言ひこともなくなつてきたよつな気がします。
では、どうぞ！

TURN15 ヴァンガオス・ソルジャー（前編）！ - 求める力の為に -

「俺のターン！ モンスターをセット、カードを5枚セットしてターンハンド！」

さて、開闢とのデュエルが始まったんだが、いきなり手札をゼロにしてしまった。何となるけどどうなるかはまだ分からぬ。

「守りを固めたつもりか？ 私のターン！」

うん、やつ思ひよね。いきなり手札全てを伏せられたらやつ思ひよね。

「そんなもの、私には通用しない！ 私はライトロード・マジシャン ライラを召喚！」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 1700

彼のフィールドに白い服を着た女性が現れる。やはりそのカードを使うか。

「バトル！ 行け、ライラ！ そのセットモンスターを攻撃せよ！」

ライラが杖を振りかざしてセットモンスターを攻撃する。その判断ははつきり言って嬉しい。そしてカードが表側になると一つ目の壺のようなモンスターが現れた。

「セットモンスターはメタモルポット。お互に手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローする」

「何！？」

メタモルポット DEF 600

俺の捨てる手札は無い。よつて、カードを5枚ドローするだけだ。向こうはかなり悔しそうな顔をしている。ま、ゴーズやオネストが捨てられたらねえ。だけど、引いたカードを見て少し笑つた。

「お前のおかげで来たぜ！ 大嵐を発動！」

成程、確かにいいカードだ。だが、このタイミングを寧ろ待つていた！

「罠発動！ ゴブリンのやりくり上手ー！」

「何だとー？」

「驚くのはまだ早い！ 残りの2枚のやりくり上手、そして強欲な瓶にこれらのカードを墓地に送つて速攻魔法、非常食を発動ー！」

「ば、馬鹿なー？」

「うわあ、凄い……」

「よくやるもんだ

「よくこんなことが起きたな

この状況を見て各自の感想が聞こえる。開闢は非常に驚いている。

ヴォール達も少し驚いてる。俺もこれにはホント驚いた。

「いくよ。まず非常食でライフを4000回復、瓶の効果で1枚ドロー、やつくり上手で4枚ドローし手札1枚をデッキの一一番下に戻し、4枚ドローし1枚戻し、また4枚ドローし1枚戻す」

龍一 LP 8000

うん、合計10枚ドローしたことになった。

「くそっ！ カード一枚伏せ、エンドフェイズにデッキの上3枚を墓地に送つてターンエンド！」

開闢が非常にイライラしているように見える。それはつましいかなかつたからか？それとも別の理由が？

「……まあいいか。俺のターン！」

さて、合計16枚の手札をどう消費しようか。

「墮天使ゼラートを捨ててダーク・グレファーを特殊召喚！」「

ダーク・グレファー ATK 1700

俺のフィールドに闇に染まつた戦士が現れる。笑いが不気味だ。

「そして効果発動、墮天使スペルビアをコストにデッキからゾンビキャリアを墓地に送る。そして闇属性モンスターが墓地に3体いるのでダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！」

ダーク・アーマード・ドラゴン ATK 2800

そして今度は鎧を装着した漆黒の龍が現れる。効果が強いから多用するんだよな、こいつは。

「そして手札断殺を発動。お互いに手札2枚捨て新たに2枚ドローする」

はつきり言って余り使いたくないカードだけどこの際仕方ない。ネクガとダクリ捨てて新しくドローする。

「更に、ダーク・グレファーをリリースし墮天使ゼラートをアドバンス召喚！ このカードは墓地に闇属性モンスターが4種類以上存在する場合、闇属性モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できる。そして効果発動。墮天使アスマディウスをコストにお前のモンスターを破壊する！」

「くつ……」

墮天使ゼラート ATK 2800

闇の戦士が消えると今度は闇に染まつた天使が現れる。そして闇を纏つた剣を振りかざしてライラを破壊した。

「バトル、ゼラートでダイレクトアタック！ 悪魔の波動！」

そしてゼラートは体中から波動を出してそれが開闢を襲つた……と思つたら、鐘の音が響き攻撃が防がれた。

「手札からバトル・ウェーダーの効果発動！ ダイレクトアタック

を無効にしバトルフェイズを終了する…」

バトル・ウェーダー DEF 0

やつかいなカードが現れたな。ここで終わらなかつたか。

「なら、ゼラートの効果をもう一度発動し、キラー・トマトをコス
トに破壊！ そして月の書を発動しゼラートを裏側守備に変更して
カードを3枚伏せてターンエンド！」

再びゼラートが剣を振りかざすとバトル・ウェーダーを破壊して本
に挟まれて姿が見えなくなつた。このターンは終わったけど何か、
嫌な予感がする……。

TURN15 ～VSカオス・ソルジャー（前編）！ - 求める力の為に～

今回の「デッキ」は闇属性モンスター「デッキ」です。モンスターは基本、闇属性ばかりを集めています。次回はこの続きになります。

では、次回もまたよろしくお願ひします！

TURN15 ～VSカオス・ソルジャー（後編）！ - 力の先にあるものとは

決着編です。では、どうぞ。

TURN15 ヴァンガオス・ソルジャー（後編）！ -力の先にあるものとは-

「ならばそのときに使わせてもらひ。罠発動、針虫の巣窟！」

伏せていたのはそのカードか。厄介だな。ダーク・アームドの効果を使わなくてよかつたけど、デッキトップが5枚も墓地に送られた。しかも全部モンスターカードかよ。困ったな……。

龍一 LP 8000
開闢 LP 4000

「そして私のターン！ 貪欲な壺を発動！ 墓地からオネスト、冥府の使者ゴーズ、ライラ、ライトバルサー・ドラゴン、ダークフレア・ドラゴンをデッキに戻して2枚ドロー！」

この状況でドローカードか！ こりこりときつて大抵嫌な予感しかしないんだよな……。

「手札抹殺を発動！ お互いの手札を全て捨てその枚数分新たにドローする！」

「！？」

そのカードもくるか。死者蘇生やゴーズが消えてしまった。しかも引いたカードはそこまでよくない……。

「そしてブラック・ホールを発動！ お前のモンスターを全て破壊する！」

「何だと！？」

今度はフィールドに巨大な黒い渦が現れてダーク・アームドとゼニアートを飲み込んで消えていった。ビリジョウ。

「お膳立ては整った！ 私は墓地のジョンインとトライエーティアを除外し私自身、カオス・ソルジャー・開闢の使者・を特殊召喚！」

そう言って彼のフィールドに彼自身が現れる。これ以上は流石にマズい！

「罠発動！ 神の警告！ ライフ2000払ってその召喚を無効にし破壊する！」

龍——LP 6000

そしてすぐに開闢に雷が落ちる。この宣告や警告を下す神様つて雷を落とすのかな？ でも、これで……。

「言つただろう？ お膳立ては済んだと！ 戦士の生還を発動！ 私を手札に戻して墓地のライコウと終末の騎士を除外してもう一度特殊召喚！」

終わると思つてませんでしたが、こんちくじゅうー また出でくるなんてどうこうことだよー！

カオス・ソルジャー・開闢の使者 · ATK 3000

「バトル！ 私自身でお前にダイレクトアタック！ 開闢双破斬！」

開闢は剣を俺に振りかざしてくる。やはり向かつてきただか！

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！ 除外してその攻撃を無効にする！」

俺の目の前にネクロ・ガードナーの幻影が現れると攻撃を防いだ。助かつた……。

「無駄なことを……。まあいい、ターンエンドだ」

そうして彼はターンを終了する。でもどうする？ 手札には聖槍に聖杯、ユベル最終形態にサイクロン、終末の騎士、混沌空間だけだ。次のドローに全てがかかるつている！

「俺の、ターン！」

そつとしてドローカードを確認する。かけてみるか。

「闇の誘惑を発動！ カードを2枚ドロー！」

ドローカードは……。いける！

「終末の騎士を除外。そして墓地から墮天使ゼラート、アスマモディウス、キラー・トマト、ダーク・クリエイター、ダーク・アームド・ドラゴン、ダーク・グレファー、終末の騎士を除外し手札から究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚！」

究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン ATK 4000

俺のフィールドに闇に染まつた長く大きい龍が姿を現す。これでオネストも怖くない！

「そしてダブルアタックを発動して手札からユベル・Das Extremes Traurig Drachen・を捨ててレインボー・ダークを2回攻撃を可能にする！」

ユベルから力を受け取つた龍は赤く光り、一つ咆哮した。

「す」「いです！」

「ああ。だが……」

「あの手札はもしかしたら……」

後ろでヴェール達が何か言つているけど、多分大丈夫だろう。

「バトル！ レインボー・ダークで開闢を攻撃！ レインボー・リフレクション！」

レインボー・ドラゴンは口から虹色の光線を開闢に向けて発射した。然し、彼の体は突如光りだした。

「フフッ、ダメージステップ、手札からオネストの効果発動！ その攻撃力を貰つて返り討ちだ！」

やつぱりそうきたか。でもね、それは既に予想済みでオネストは怖くないとさつき言つた！

「罠発動、透破抜き！ 手札、墓地から発動したモンスター効果を

無効にしゲームから除外するー。」

「何ー?」

わざと貪欲で回収してたからそんな感じはしたよ。これで勝ちだー!。

「ぐう……」

開闢 LP 3000

「これで終わりだ! レインボー・ダークでダイレクトアタック!
レインボー・リフレクションー!」

再び発射された虹色の光線が今度はプレイヤーに向かった。

「ぐわああああああ……」

開闢 LP 0

勝つことはできた。周りのソリット・ヴィジョンもテュエルが終わ
つて消えていった。

TURN15 シバカオス・ソルジャー（後編）！ -力の先にあるものとは-

一応決着はつきました。だけど、まだ終わりませんよ？ 次は会話
が中心になります。

では、次回もよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862z/>

遊戯王～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

2012年1月13日16時46分発行